

INCUNABULA II インキュナブラ



花壇の中のガニメデ
ある都市伝説
「およばれ」

Grasshouse

花壇の中のガニメデ

※以下はシビラEによる『インキュナブラ』諸編の一編である。(編者註)

あのときもし、公園の花壇の中からガニメデが顔さえ出さなかったなら、こんなことにはならなかっただろう。そう思うと、今さらのように胸が痛む。

薔薇の花の冠をつけたガニメデ、目を細めて気持ちよさそうに日向ぼっこをしているガニメデ、おいしそうに蚯蚓や、蜥蜴や、果物を頬張るガニメデのあのいびつな顔が、目に浮かぶ。

それは日曜日の午後、高学年の孝史と美夏、そして妹のレイとの三人で、花水木公園を通り過ぎて行こうとしたときのことだ。

孝史と美夏は、背中に塾の宣伝のイニシャル入りの紺色のバックを背負わされていた。塾の生徒の背中を利用して企業広告を展開しようとする、このわざとらしい青いバックも嫌いだったが、塾で先生に叱られた帰りで、ますます人生が嫌になっていた。

この先生は、メガネをかけたイケ好かないデブの大学生で、「あのさ。前も教えてろう、お前に。何やってんだよ。ちゃんと、教えたこと守ってくれよ。疲れるなあ、頼むよもう」と、せせら笑うように言われた。

教室のみんなが笑った。笑い者にされた。半分はあいつのウケ狙いなのだ。毒舌が、自分の愛すべきキャラだと勘違いしているヤツ。死にたくなかった。

塾なんてしょせん客商売で、こちらが客なのに、あの教師はその辺がわかっていない。孝史は、後半の授業ではふてくされ、始終うつむき、講義は頭の中に入らなかった。

帰り道も、すねて柵の端っこを蹴っ飛ばした。小さな竹の柵が、割れた。「あ、いけないんだ、いけないんだ」と美夏がいった。「いけないんだあ」と妹までが真似をした。

最近、妹は可愛くない。まるで美夏が自分の姉貴のように、ふるまっている。妹のレイは、孝史と美夏の塾の帰りを狙って、帰り道の公園の門のところで待っているのだ。じつは美夏がお目当てなのである。何でも真似をする。

「ちょっと待って」と美夏がいきなりしゃがみ込んだ。「猫じゃない？仔猫か何か、中にいるわ」

確かに花壇の奥に何か茶色いものがある。暗い縞のような模様が見えた。「え、猫？ 猫見たい」と妹が近寄る。膝を抱えて、美夏と並んでしゃがみ込む。隣にしゃがんで、にこにこしている。孝史はますます面白くない。

「猫なんて、いらねーよ、この世から」ぺっと唾を吐く。「猫、死ね。地球から、猫死ね」「猫に、当たらないで」くるりと振り向き、美夏がいった。「あたし、猫派なんだから」「何いってんだよ。第一、犬のが、格好いいだろ」第一のあとの第二を、どうしようと思った。「第二に……番犬になるし」と続けた。

「あたしも」妹がいった。

「だろ。レイは犬の方が、好きだよな」

「違うもん！ あたし猫派だもん」

妹は、口をとがらせ、反旗を翻した。

兄は、むっとして唇を噛んだ。こいつ、猫派という言葉すら、今日はじめて知ったくせに。そのときの美夏の得意そうな顔ったら、なかった。

顔をにんまりとなごませ、ヨシヨシと言いながら、孝史の妹の頭を撫でた。レイはうれしそうだ。

もう、兄貴の面目丸潰れだった。ますます死んでしまいたい。

「うえっ」とつぜん、妹が妙な声を出した。

「猫じゃ、ないよーお」妹は、目を訴えるように大きく見開いて、立ち上がる。まだまだチビだ

。

孝史と美夏は、顔を見合わせた。

「やっぱり、捨て犬か」

「大変だ」妹が叫んだ。「キモイよ、これ。大変だ。大変だ。鰐だァ！」

小さな体を振らせて、全身で叫んだ。

「嘘だろ？」

「鰐だ、鰐。鰐が、出たよー」

妹は、物凄い顔をした。顔の輪郭から、目や口が、はみ出ているような顔だった。

ここで怖じ気づいたら、男としての沽券にかかわる。もっともコケンが何を意味するのか、わからなかったけれども。

孝史は手前に落ちていた大型の枝を拾って、花壇の中をつついてみた。

何か茶褐色の生き物が、ぐるりと、体の向きを変えた。意外に、でかい。傍のツツジの小枝が折れる音がした。枝に触れると、固い。背中にこっぴりとした艶がある。

「亀だ」

「あ、やだ。これ、噛みつき亀じゃん。テレビでやってたよ」

美夏が悲鳴をあげた。「誰かペットにしたの、捨てたんだ」

植込に一步踏み込んで見ると、その怪物は、サツキの枝の隙間でのけぞるように首を反らせ、全身から殺気を放ち、こちらを威嚇した。

体長は二十センチ以上はあるだろう。甲羅が古びた黒いミットのように、鈍くひかっていた。

「カミツキガメか。やべえ」

「危険だよ」

「カミツキガメ、きけん。カミツキガメ、きけん」

妹は両手でメガホンを作りながら、馬鹿みたいに繰り返した。「カミツキ、カミツキ、血が出ちゃう」

「やめろ。うるさい」

「すぐに警察、一一〇番。カミツキガメは、危険です」

はしゃいでいるのか、妹はふしをつけて歌った。

「頭、でっけえ。凄いな、この顔」

「凶悪犯みたい」

「ヤクザだな」

「目が小さいし」

「ヤクザのおじき、って感じだな」

「何、それ？」

叔父貴というのは、漫才師のボキャブラリーから覚えた。

「目が小さくて、鋭くて、怖そうだから。ヤクザのおじき」

「カミツキ、カミツキ、血が出ちゃう」レイが両手で砂を宙に舞わせた。

「うるさいよお前は。あ、砂が目に入った」

異様な姿の亀は、平たくなった灰色の大きなエノキダケのような前脚を、踏ん張った。

そして何を思ったか、脚をふんばって、くるりと振り向き、のそのそと退散を始めた。

「なんだこいつ、根性ないな」

そもそも名前が怖いので、飛びかかってきたらどうしようと思っていたが、意外にも臆病そうだ。爬虫類のくせに、聡明にも負ける喧嘩はしないらしい。

孝史はここで少しはったりを利かせようと、花壇の中にしゃがみ込んだ。

「危ないよ。噛みつかれるよ」

「カミツキカミツキ、血が出ちゃう」

「やめろってば。そのフレーズ」

孝史は大きく深呼吸して、大胆にも亀の甲羅に両手を伸ばし、一息に甲羅の両端を掴んだ。

きゃっ、と二人の女子は声を上げた。

彼は、相手の頭も、脚も、こちらまで届かないことを確認してから、鼈甲色の鞆のような塊を、ゆっくりと抱きかかえた。何が詰まっているのか、けっこうな重量感がある。厚みのある甲羅も不思議な感触だ。乾いた日の温もりがしていた。

奇怪なその亀は、サツマイモのような太い首を、ぐいと斜めに反らして伸ばし、四肢を動かしながら、大きく桃色の口を、パツクリと開いた。

「……ガメラだ」と美夏が呟いた。

大きさは、赤ん坊ほどもある。二本の鋭い牙がある。顎を遠ざけてないと、噛まれそうだ。

さすがに怖かった。

「なんだよ。何もできねえでやんの」

少年は、馬鹿にしたように、うそぶいた。

「放しなよ、タカシ。まじで、ヤアばいって」

美夏が大きく目を見開いて、両手でバツ印を作って口元を押さえた

レイは隣で、その格好をそのまま縮小して、真似している。正しくコピーするためか、ときどき姉貴分のかっこうを、ちらちらと覗き見している。

「ふうん。なかなか、ふてぶてしい顔つきだな。よし。コイツ、気に入った」

敵将を評価してやる勇者の口調で、孝史は厳かに呟いた。

「どうすんの？」

「飼うんだよ。しょうがないだろ。コイツこのままだと、保健所に殺されちゃうよ」

「犬じゃなくても、保健所が殺すの？」

「何でも殺すよ、保健所は。ホームレスでも、フリーターでも、みなし子でも、役立たずはほとんど殺処分するんだ」いい加減なことを言った。

「名前は、何にしよう」美夏が腕組みをした。

「カメオ！」と妹。

「うはっ。アクセサリーみたいで、お洒落かも」美夏。

「つまんないよ。……もっとカッコイイの、ない？」孝史がうんざりした口調でいった。

「じゃ、マイケル」美夏が叫んだ。

「なんで」

「わかんないけど。とりあえず、かっこいいじゃん、マイケル」

美夏はちょっと美人で可愛いのに、発想はつまらなかった。

孝史は、カミツキガメを塾のインシャルの入った紺色のバックの中に入れて、そのまま本を上から被せた。中で爪を立て、がりがりともがいている。背負うと、異常に重たかった。

公園と住宅街を結ぶ歩道橋を、無言で足早に歩いていく。

「ヤバイよ、絶対。破けたらどうすんのよ」

わざとこれみよがしに無茶をやる孝史の後を、美夏は、息を乱して追いかけてきた。

途中、舗道脇で、向こうから来る自転車とぶつかりそうになった。

「おい」と低い嘎れた声で、いわれた。

黒いキャップにサングラスをつけた痩せた男が、片脚を地面につけたまま振り向いて、何か小声で凄まれた。うるさいなあ、どうでも良いや、と孝史は思った。黒メガネをかける奴は、案外、気が小さい奴だという。自転車を停めて、首を捻ったままでこちらを凝視し、凄みを利かせている。でも自分の背中のバックには、恐ろしいカミツキガメが隠れているのだ。

孝史は、何となく無敵になったような気がした。

帰宅してからは、物置から古いプラスチックの盥を引きずり出して、水を入れ、上から段ボールを被せた。とりあえず、庭の端から蚯蚓を掘り出し、冷蔵庫の残り物のソーセージを入れてやった。

亀は中のごそごとと動いている。熱心に仕事をしているような音だ。盥は、建物との間の日陰、できるだけ裏庭に近くて、窓から隠れた場所に隠した。

その晩、孝史が二階の父親の書斎で、こっそりと科学の月刊誌の天体特集を眺めていたら、ちょっとよさそうな名前が飛び込んできた。父親は家電企業に勤めているが、科学雑学を眺めるのが趣味なのだ。

赤い目玉のような模様のある木星のイラストが美しかった。木星の衛星に「ガニメデ」という星がある。蟹の化け物みたいだが、あのカミツキガメの不細工な顔には、なかなかふさわしい

「木星の衛星って、何があるか知ってる？」

階下に戻り、リビングで新聞を読んでいる父親に、それとなく聞いてみた。

「ああ、エウロパと、イオだ。あとはなんだっけ。ガニメデかな。駄目だな、すっかり忘れてる。もと天体オタクとしたことが」

「ガニメデ……」なんだ知ってるのかと、少しがっかりした。

「うむ。もともとは、ギリシャ神話に出てくる美少年の名前だよ。それに確か、太陽系の衛星の中で、最もでかい星のはずだ」

父親は得意そうに応えた。

思考が一瞬、とまった。吹き出しそうになった。

ガニメデは、大蟹の怪物ではなかったのだ。全然、イメージが違う。しかも太陽系最大の衛星でもあるという。なかなかいいネーミングだ。少なくとも日曜日の午後、塾の教室で嫌味を言われたことは、すっかり忘れることができた。

月曜日、登校前に縁の下の盥の中を覗いた。すっかり蚯蚓は消えていた。

学校で、カミツキガメの名を「ガニメデにする」というと、美夏は「……変なお」といった。

。

「やっぱりマイケルじゃ、駄目なの？」うらめしそうにそうった。なんとなく、不服げだった。

。

厳めしいごつごつとした感じが、カミツキガメにはふさわしいのだと、孝史は説得した。

「な。だから、ガニメデにしようぜ」

「……ゆずるよ、そんなに言うならば」

意外にも美夏は、妥協した。後ろ手をして、うつむいて、片脚のつま先を立てている。

あの小さな怪物の出現で、少し二人の力関係が、微妙に変化したらしい。

ガニメデは、木星の衛星のひとつに過ぎないくせに、惑星である水星よりも大きいという。

ギリシャ神話に出てくる美少年の名前なのに、カミツキガメのガニメデは、目が小さくて、下顎が大きくはみ出て、どう見ても凶悪犯か、ヤクザの親分か、少なくともその「おじき」級の凄味なのだ。

ガニメデは、ちょっと見には怖そうな顔をしているわりには、おとなしかった。ときどき、病気なのかも知れないと思う。獣医に診せると、危険な放置ペットとして取り上げられてしまうかも知れない。そうしたら、殺処分だ。少し刺激すると、カッと口を開いて威嚇する。凄い牙が並んでいて、これだけ写真にとったら皆びっくりすることだろう。しかし、性格的には諦めが早く、淡泊で、芝生の上を下ろすと、ぐるりと向きを変え、藪の中へと逃げ込もうとする。

「お前、こんなに目立つキャラなんだから、隠れたって駄目だってば」

孝史は慰めるような口調で笑った。

蚯蚓、ソーセージ、果物、何でも食べる雑食性だった。

驚いたことに、この変な亀は、「ガニメデ」と呼ぶと、サツマイモのような顔を、不器用に、

おずおずと、こちらに向けるようになった。そのうち、「おいで、ガニメデ」というと、いかにも納得し、引き受けたような顔をして、右脚を踏ん張り、左脚を踏ん張り、のそりのそりと、ついてくるようになった。確かに智恵はあるらしい。

顔はちっとも可愛くないのに、なんとも可愛い、変な奴……。

家族にもレイにも内緒で、散歩に連れてゆく。針金で胴のところを結わえて、細いチェーンをかけた。公園の脇の斜面になった雑木林。遊歩道の下の方で隠れて見えない。散歩には美夏も同行したがった。

「友達に言うなよ」

「うん」と美夏はうなづいた。「犬みたいに慣れてきたね」と感心している。

ガニメデを調教して馴れてくればくるほど、美夏の尊敬が高まるような気がした。

悪い気はしなかった。妹も、以前より兄貴を尊敬しているように思われる。「カミツキガメを慣らすことのできるウチのおにいちゃんは、凄い」と思っているらしい。

どうせレイの気持ちは、美夏のコピーに過ぎないけれども。

こんな醜いいびつな顔をした奴が、自分たちのアイドルだという逆説が、孝史は可笑しかった。夜中ひとりで、それを思うと、クククっと笑いが込み上げてくる。枕を抱きしめ、拳で叩き、押さえきれず、「あははは！」と声が洩れる。

いきなりドアが開いて「孝史。あんたなに笑っているの。気持ち悪いな」と母親が覗いた。

「ちょっと、漫画見てた」

「宿題、ちゃんとやったの」

「うん」

「だったら、早く寝なさい」

「いま、ちょうど寝ようと思ったところなのに。もう、うるさいなあ」

日向ぼっこをしているときは、いかにも気持ち良さそうだった。

天気の良い休日、花水木公園の雑木林で、紐を付けたまま、亀を散歩に出した。

レイには内緒で出てきた。あいつがいない方が、なんとなく楽しいし、美夏がしおらしくなる傾向にあるのだ。隣にレイがいると、ちょっと姉貴風を吹かす傾向にある。

「こんなお前がなあ、世の中に出すと、悪者なんだもんなあ」亀の頭を軽くつつく。

「世の中、間違ってるよね」

「だよな。違うんだよなあ、マスコミは。何も分かってないよ」

「分かってない、分かってない。ちゃんとカミツキガメのこと、取材してないんだよ」

美夏は、しゃがんだ格好で、ひとさし指を怖る怖る伸ばして、ガニメデの甲羅をさわった。

最初、ちょっと触ってから、すぐに引っこめていた。面白くなってきたのか、何度もそれを繰り返して、だんだん長く手を置くようになり、ついには、芝生に寝そべった格好で、甲羅の上に頬をあてるようになった。

Tシャツの背中がめくられて、少女っぽいきゃしゃな裸の脇腹まで、覗いている。本人は、そんなことには、まったく気づかずに。

「お前、けっこう凄いな。やることが」

孝史は、冷汗が垂れるような気がした。

「女だからね。そういうもんよ」

美夏は、甲羅に頬ずりして、ゆっくりと撫でている。目を薄く閉じた。

孝史は少し、どきりとした。

ガニメデは、首をのぼし、何が起こったかわからないけれども、どうやら、自分が愛されているのを自覚しているらしい満足げな目で、空を見ていた。

青空や、雲や、鳥たちが見えているのか、見えてないのか。単に心地良い微風に、顔をかざしているだけなのかも知れない。それでもとても幸せそうに見えた。さすが「おじき」の余裕たっぷりだった。

風が吹くと、薔薇の花びらが、はらり、はらりと、芝生の上に、散った。あちらこちらに落ちた夢の切れはしのような花びらは、尖った針のような芝の葉先で、ふんわりと支えられていた。

美夏は、芝生にしゃがんで、胸を膝小僧に押しつけるようにして、薄ピンク色の花びらを一枚一枚、集め始めた。

それからガニメデの頭を、水道の水で少しだけ濡らしてやって、薔薇の花の冠を作った。

亀はぐいっと、頭を反らす。

「ははッ。可愛い。亀の王様」

「ガニメデー世」

「あ、ガニメデー世大王、走ります。走ります」

何を思ったか、カミツキガメはのっそりと、始動した。

ずるり、ずるりと、雑草を踏みしめ、先を急ぐ。

藪の向こうの小道を越えると、池があった。

まばゆい光を反射している水面に、滑り込む。まるで小さな進水式だ。

紐がついているので、そのまま水に入らせてやる。余裕たっぷりの見事な泳ぎっぷりを見せた。水に浮かんだガニメデは、薔薇の冠を頭上に乗せ、しばらくそのままにしていたが、とうとう堪えられなくなって、首を水に突っ込んだ。

そのとたん、頭に貼りついていた薔薇の花びらは、波紋の中に、ゆっくりと放射状に広がっていった。水中花が開くように、ピンク色の花弁が四方に放たれた。少し先まで泳いでいって、物憂くたゆたう水面に、亀はときどき頭を覗かせた。

枝を透かした午後の木洩れ陽が、明るい水面にしたたり落ちている。ときどき鯉が花びらをつついた。

「ねえねえ。タカシ、こないだのあいつだよ」

美夏が中腰になって、シャツの端を引っ張る。

「え？ あッ……」

黒いぴったりしたTシャツを着て、黒いキャップをかぶり、温かいのに黒い革手袋までした気

障な奴。あまり見かけない高そうな自転車を、ぴかぴかに磨き上げて男は乗っていた。

そいつは、一気に公園の中の坂道を、マウンテンバイクのような勢いで、降下してくる。雑木林と池との間を通っている狭い散歩道だ。池の脇は急な傾斜になっている。

それはいかにも二人を意識した、威嚇的な振る舞いだった。わざと池畔でガニメデと遊んでいる孝史たち彼らの近くまで寄った。そこで速度は落とさず、一瞬腰を浮かすと、ギヤを入れ換え、凄まじい勢いで対面側の坂の方へと登っていった。ゆるやかなUの字の道を底まで降りると、そこで気合いを入れ、さらに反動を利用して、再びグググッと上っていった。いかにも走り慣れているようだった。

気障ったらしい黒づくめの男は、明るい緑陰のトンネルの向こうへ、小さく消えていった。

「作業員だ」と孝史はいった。

「なに、それ」

「北朝鮮作業員。俺たちのやることを見張っているんだ」

「どうして？」怖そうに美夏は眉をひそめる。

「わかるもんか。あいつら、極秘の仕事をやっているんだから。あの格好は、スナイパーだな」

「……ふうん」

スナイパーが何かを質問してくれないので、孝史は少々がっかりした。興味がないのか、あるいは、それ以上質問するのが美夏としては、不安だったのかも知れない。

「見せてよ。カミツキガメ」

「知らないよ」

「いいから。見せてってば」

いつのまにか知られてしまったのか、孝史は学校の渡り廊下で質問攻めにあった。どうして知られてしまったのだろう。

「そのカミツキガメって、一体なんのことかな。さっぱりわからないな」

「嘘だあ。減るもんじゃなし。ケチ」

危険なペット扱いなので、人には教えたくはなかった。誰にも言ってはいない。犯人は、美夏かレイしかいないはずだ。それとも公園で、誰かに見られてしまったのだろうか。信頼できる友達も、両親も、敵のように思われた。世界が疑わしくなってきた。

孝史は次第に無口になっていた。

授業も上の空で身が入らず、黒板よりも飛行機雲が気になった。全体に注意散漫になってきたのか、試験の成績もじりじりと下がってきた。

「あのさ、俺に恥かかせんなよ。このクラスにいて、この点数はないだろ」

模擬テストの成績が下がったので、塾のメガネデブの先公に、名指しでいわれた。「……なんだよ、バイトのくせに」と孝史は呟いた。

このところ、池で泳いでいないせいか、ガニメデの方も元気がない。盥の中であまり動かないのが心配だ。甲羅の中に閉じこもったまま、首を出さない。餌として与えた桃色の蚯蚓も、薄

く張った水の底で、S字になったりQの字になりして、のたくっているままだった。

それはまるで、孝史自身を映し出す鏡のようであった。甲羅型の鏡――。

朝、孝史は洗面台で自分の顔を眺めてみた。顔がごつごつしてきた。トゲすら生えているように見える。目の錯覚だ。カミツキガメの顔をしてみた。「おじき」とつぶやく。少し可笑しい。けれども笑ったあとで、しんみりと淋しくなった。ガニメデは、このまま死んでしまうのだろうか。もとは野生だったくせに、弱い奴。

勉強部屋に戻って、布団をかぶった。

「美夏もレイも、信じられない。あいつらが、チクったんだ」

彼は布団の中に閉じこもり、唇を噛んだ。レイとは、口を利かなくなった。

最初は何か悪戯をしかけられているのだろうと思ったのか、妹はにやにや笑っていた。そのうち、本当に無視されているのに気がつく、だんだん泣きべそになっていた。それでも冷酷に無視してやった。

孝史は部屋の中で、自分の作りだした暗い繭の中に閉じこもった。それは次第に霧から繭へと変化し、さらに固い褐色の甲羅へと角質化した。

――ベットで布団を頭から被り、手を引っ込め、脚をひっこめる。手だけ、出してみる。少し肌寒い。今度は首を出して、上に反らし、口をカッと開けてみた。カミツキガメの気持ちになってみる。やい、ガニメデ、お前は何で噛みつくんだよ。他の生き物が怖いのか。弱虫め。本当に強いのなら、ゾウガメのように、堂々としているもんだぜ。

孝史は空想の中でガニメデになりきり、一体化してみた。

カミツキガメは、悲しい。醜く危険で獰猛だ。どうしてそんなに凶暴なふりをするのだろう。わざわざ憎まれっ子になるのだろう。孝史は布団の中に閉じこもり、外の世界を遮断した。亀の格好をしたまま、亀の見る永遠の夢を見ようとして、そのまま眠ってしまった。

「もう、八時じゃないの。どうしたの孝史」

カーテンが乱暴に開かれた。まぶしい。母親のキツイ口調だ。味気ない現実の世界だ。

「だるい。今日は休むよ」

「駄目よ、ずる休みじゃないの。勉強、置いてかれちゃうわよ」

「どうでもいい……」

「どうでもよくは、ないわよーオ。ちゃんと布団から出てきて、説明してちょうだい！ほら、ここに座って。どこか悪いの。それとも、学校、行きたくないの。あんた、ママのこと、泣かせたいわけ？」

母親はベット脇に立ち、布団を耂りとろうとした。

孝史は布団をわし掴みにして、それを奪われまいとした。布団をめぐる攻防戦だ。布団の甲羅の中で、身を縮かめるようにして、外の世界を閉ざした。

美夏から連絡があった。少し言い合いになった。

「あたし、ガニメデのことってないよ」と訴えた。「木村君たちだよ。林の中で見てた」

目撃されていたらしい。

「多分、ガニメデをちゃん泳がしてないから、あいつ、調子が悪いんだと思う」といった。

美夏は散歩につきあうといった。生意気にも、自分がいた方がガニメデも和むともいった。

塾の青い背負いのバックに亀を入れた格好で、二人で花水木公園とへ入った。

何だかもがき方にも、元気がない。冬眠には、まだ早いはずだ。

いつのまに感づいたのか、レイもついてきた。

路地から路地へと移動して、巻いてやろうと思ったけれども、時間差を利用したのに、行き先が決まっているので、待ち伏せされてしまった。

「いいじゃん、一緒に行けば」と美夏はレイを手招きした。

最近はいいつも智恵がついている。

「カミツキガメ、きけんです。カミツキガメ、きけんです」「カミツキ、カミツキ、血が出ちゃう」

妹は手でメガホンを作って、歌うように繰り返す。

兄がやめろといっても、「だって、テーマソングだもん」といって、また続けた。

ガニメデは最初のうちはおとなしくしていたが、池で泳がせてもらえるのかと気付いたらしく、途中から、ガリガリ、もぞもぞと動き出した。

美夏と孝史はその音を聞いて、しめたと思った。

池を前にすると、じっと考え込んでいたが、突如、するりと入った。

池で泳がせてから、小さな半島のように突き出した弁天様の林で、日向ぼっこさせた。高校生のカップルがよく使っている隠れた一画だ。今日は誰もいない。

ガニメデは何か考え込むように、うつむいて草の中に顎をつけていた。目をうっすらと閉じてゆく。甲羅が少しずつ乾いて温まってゆく。腕立て伏せでもしそうだったが、そのままだった。

ぼんやりとした少しだけ悲しげな時間が過ぎてゆく。

三人は、膝を抱えた格好で、ゆらりゆらりと光を反射している水面を眺めた。

力を失った太陽が、卵のような黄色味を帯びて、雑木林に差しかかっていた。

帰ることにした。

途中、公園の出口に近い芝生の平らになったところで、少し歩かせた。しばらくここには来られないかも知れない。何だか名残り惜しかったからである。

その時、厭な気配がした。

振り向くと、黒メガネのスナイパーがいた。奴は十メートルぐらい背後で、自転車に跨いだままの格好で薄笑いを浮かべていた。

美夏は「あいつだ。作業員だ」と小さく叫んだ。「やばい」とレイが膝を叩いた。

孝史はすぐに重たい亀を持ち上げ、バックに詰める間もなく、歩き出した。

焦燥で目の前が黄色く染まった。

歩道橋を過ぎれば、住宅街のどこかの細い路地に入ることができる。余所の家の庭にでも潜り込めばわからないだろう。

三人の後ろを、のろのろと不吉な自転車はつけてきた。

孝史と美夏は、おのずと足早になる。レイが泣き出しそうになるのを堪えている。

自転車の男は黒い影のように、音もなく寄ってきた。

男はメガネを少しずらすと、しわがれ声でいった。

「俺はな、一度うけた屈辱は、決して忘れない。必ず復讐してやる」

サングラスの男は、自転車を林に向けて倒すと、そのままラグビー選手のように背を屈めてやって来て、タックルするようにしてガニメデを奪いとった。「相手が、誰であっても」

冬でもないのに革手袋をした手で、亀を抱えた。孝史が殴ろうとすると、男は亀を脇に置いて、黒い手袋をした手で、手首を奪った。口をひねり、嘲笑的な顔をしてみせた。サングラスを透かして見える目が、笑っていない。

「やるのかよ。やってみろよ」

低い絞り出すような声でいった。両手を動かすと、手首を捻られ、痛みが走った。横目で見ると、亀は草地の中を反対側に逃げようとしていた。

「お前に、絶望ということを、教えてやる」

黒ずくめの男は、圧倒的な強さを見せつけた。手出しはせず、見下ろして、腹で押しつけてきた。殴って来ないところがずる賢い。固い腹筋と胸板が、自慢のようだ。

美夏が追いかけてきた。レイが大胆にも、石を投げた。男に当たった。チッと舌打ちする。

黒いスナイパーは、亀を抱えたまま、歩道橋の所まで来ると、勝ち誇ったようにこちらを見て

、「お前らのために、絶望を――」と叫んだ。「……ぜつぼうを」

男はガニメデを、両手で持ち上げた。

太陽が、亀の甲羅の輪郭を、日蝕のように暗く縁取った。

通行人は誰もいなかった。

車の騒音、遠いざわめき、すべての音が制止した。

ガニメデは首をのけぞらし、宙で四肢を伸ばしてもがいていた。

三人は、歩道橋の入口で青ざめていた。

男は両手を隙間に差し出すと、こちらを見て薄笑いしたまま、手を左右に、放した。

それは手品師のように、冷静で、静かで、美しい手つきだった。

その直後、パカッとも、パシュッとも、グシャリともつかない、不気味な音が下で響いた。

世界が割れた。

それは、空気が籠もったような、路上で何かが潰れた感触の鈍い絶望的な音だった。

血の気が引いてゆく。「あ、ああ」と孝史は唸った。何か強い磁力に惹きつけられるようにして、孝史は身を乗り出した。歩道橋の下を覗いた。

鮮紅色の濡れた塊と、灰緑色の残骸が、液体とともに、飛び散っていた。

ううう、と悲痛な声が突き上げた。脚から力が抜けわなわなと体が崩れる。

再び、騒音が戻ってきた。

「ちくしょう」

くるりと振り向くと、黒づくめの帽子の男は、サングラスを外し、冷たい目で孝史を睨んでいた。首を捻り、気持ちの悪い、極端な笑顔を試みさせた。

投げキスでもするような小さなおちょぼ口をし、声を出さずに「ぜ・つ・ぼ・お」といって、ニヤついている。ニカッと笑う様は、まるで狂った人間のようなものだ。亀を殺すために生きているような奴だった。あいつ、わざときちがいのふりをしているんだ、と孝史は思った。

通行人が不審そうに見ているが、男はまるで関知しない。

スナイパーは、両手をひらひらさせながら、妙な腰つきで三人の脇をすりぬけると、再び、黄色い顔を横に向けて、気持ち悪い笑顔を試みさせた。

孝史は悔し涙を流しながら、後ろから蹴りを入れたが、軽く足で払われた。孝史はフェンスに攻め込まれ、胸のところに、片膝をぐりぐりと強く押しつけられた。

「言うんじゃねえぞ。誰にもな」無力感を感じた。圧倒的な体力差だった。

涙が流れて、仕方なかった。

男が公園の方に去ってから、レイが階段のところまで行って、身を乗り出して叫んだ。

「ああっ。車がガニメデを轢いてゆくよー。どンドン轢いてく。体が散らばってるよー。カミツキ、カミツキ、血が出ちゃう」

「もういい。やめろレイ」

あの交通量では、死体を片付けることすら出来なかった。

ガニメデー—あんなに可愛くない顔をしながら、なんとも可愛かった奴は、この世にもういない、そう孝史は思った。

歩道橋の背景の公園の樹木が暗緑色にゆれて、白い路に日が強く照りつけていた。

*

その夜は、暗い興奮で眠れなかった。

口をすぼめて「ぜ・つ・ぼ・お」といったあの男の嫌な顔が、記憶にこびりついて、剥がれなかった。いくら寝返りを打っても、毒みtainな液体が、胸でとぐろを巻いている。孝史は、布団を甲羅のように被り、亀のように手足を引っ込めた。

.....薔薇の花の冠をつけたガニメデ、目を細めて気持ちよさそうに日向ぼっこをしているガニメデ、おいしそうに蚯蚓や、蜥蜴や、果物を頬張るガニメデのいびつな顔が、目に浮かぶ。

その晩、いろいろな夢を見た。粘っこいような、暗いような、不快な夢だった。

深夜をかなり過ぎて、ようやくひどい疲労感の中で眠りに落ちた。

—そして、いつものように、朝が来た。

登校の途中、しわしわとした太陽の光が体に染みこみ、辛い気がした。そこはもう、ガニメデのいない、ざらざらした世界だった。

「タカシ、気を落とさないで」

朝、校門のところで美夏と出会った。

昼過ぎには雨になるという曇天だった。

「うん」

「自殺するんじゃないよ」

「しないよ」

二人とも、次第に小走りになった。

「あいつは、自分の絶望を、人に伝染そうとしたんだよ」

「そうかも。……でもお前、凄いこというな、ときどき。冗談はつまらないのに」

「あのとき、メガネはずしたでしょう。小さい、しょぼしょぼした、悲しい目をしていた。工作員でもスナイパーでも、なんでもないよ」

「知ってるよ。もちろん、みんな嘘さ。でもヤツの顔は見なかった」

他の生徒達も焦って、早足で昇降口に急いでいた。

「ガニメデは死んだけど、あたしたちは……生きていかなけりゃ、ならないの」

「ああ。わかってるよ」

孝史は、うつむいて帽子を目深にした。「わかってるさ」

「授業、始まるよ。走ろうー」

美夏はそっくりながら、孝史の手をとって、走り出した。

(シビラEによる『インキュナブラ』諸編の一編)

拘置所に所属している死刑執行人は、職務遂行後に、同僚三人だけでしんみりと飲むのだという。荒涼とした恐怖と敬虔さ、微かな死臭のまじった複雑な気分を、そのまま妻子のいる家庭に持ち込みたくないためである。

執行者は専門職ではなく、法務大臣による執行命令が下った後に、多くの刑務官の中から選ばれる。新婚ほやほやの幸せ者や、近々子供が生まれる予定の者は、外されることが多い。

刑の決定は、当日の早朝、暗いうちに死刑囚本人に告げられ、ほぼ午前中に処刑される。

祭壇室で、教誨師の僧が読経を始めると、刑務官の三人は、ボタン室の壁に向かう。

最後の言葉を語り終えた受刑者は、祭壇に回れ右をさせられて、明るく清潔な地下絞架式の絞首刑室に、おずおずと移動する。

この時、恐怖で脚がもつれて、まともに歩けない者も多い。

そこで震えながら、白布を頭部に被せられ、膝のベルトをきつく締めつけられる。

予定時間を迎えると、拘置所の所長の合図にあわせて、刑務官は同時にボタンを押す。

三人の誰かが押したボタンの信号が、踏み板を外すのである。

――ガタリ、と非情な音がして、受刑者の姿がすっと消える。

刑務官はそこで、ひと呼吸する。

首に巻きつけられた強靱なロープが、落下による強い衝撃により、瞬間的に延髄と頸椎を骨裂させて、受刑者を縊死に至らしめる。

三人の刑務官は一步さがり、頭を少し下げ、壁の前で小さく合掌をする。

この物理的なショックは、しっかりと頑丈に作られた近代的な拘置所の建造物においても、壁や空気を通して、微妙に伝わってくる。

床下に消えた死刑囚は、吊されたまま、宙でしばらくもがくこともある。両膝もベルトで固定されているので、それほど派手には動けない。いくぶん捕獲された動物のようにも見える。しかしこれは肉体だけの反射的な痙攣で、本人はすでに意識を喪失している。

しばらくすれば動きは止まり、あとは空調音だけがひびく永遠のような静寂が、物憂げに支配する。

現場当事者だけの奇妙な直感により、自分の押したボタンが受刑者を死に至らしめたことが、当の執行官だけにはわかるという。むろん、複数のダミーのボタンが同時に押されるので、これは理論的にはありえないことだ。しかし潜在意識をしめつけるような重苦しい疑念が、当人だけでなく、他の二人にまでも伝わってくるらしい。ギターやピアノなどのバンドメンバーの楽器の扱いで、相手の体調や精神状態が何となく伝わることによく似ている。

とはいうものの、冷酷に見えるこれらの任務は、最終的には国家と憲法の意志のもとに日々淡々と遂行されている形式的な実務の一つに過ぎない。

「法務大臣は、単にハンコを押すだけだからな……」

というのが、彼らの精一杯の皮肉である。

当日、任務に携わった刑務官には、所長から二万円の「執行手当」が手渡しで支給される。

その晩酒を飲むのは、一仕事終えた解放感と、「お清め」の意味もあるという。どちらかという、落ちついたバーではなく、適度に騒がしい居酒屋が選ばれる。できれば学生などがいて、賑やかで大衆的な明るい店がいい。

三人は、カウンターか壁際のテーブルで、生ビールのジョッキを酌み交わす。

彼らの間には、他のサラリーマン連には見られない、お互いへの敬意と、親密さの雰囲気漂っている。一見、どういう職業の者かは傍目にはわからないはずだ。

居酒屋では、その日の任務については一切ふれないのが不文律となっている。

しかし勘定を払う段になると、他の二人が、一人に奢る。

奢る側の二人は、その際に目で合図しあう。理由は告げられることはないが、奢られた当人には、よくわかっている。執行室を出て以来、鳩尾のあたりが重苦しく、寒むけを伴った脅えと戦慄が、ずっと消え去らないからである。

初体験の若い刑務官は、これでようやく一人前と見なされる。

十分にアルコールがまわった彼らは、勢いでカラオケに行くこともある。大抵は、得意の持ち歌を持っている。女心を歌うこぶしの利いた演歌か、湘南系青春ソングのような歌に人気があり、ヤクザや渡世人を歌ったものは敬遠される。どうやら、思い当たる顔が妙にちらつき、しんみりしてしまうらしい。

こうして彼らにとっても、特別な一日が終了する。

「ごくろうさまでした。それじゃ、また……」

三人は、駅の改札やプラットフォームで、他の勤め人と何ら変わらない礼儀正しい挨拶をして、穏やかに別れる。電車内では、無名の帰宅者の一人として、コートの襟に首を深くうずめ、自宅近くの駅に着くまで、それぞれの孤独な時間に耐えなければならない。

――ある中年の女性ドキュメンタリー映像作家が、彼らの記録映画を作ろうとしてずいぶん前から拘置所と交渉しているが、いまのところ丁重に拒否され続けている。

※以下はシビラEによる『インキュナブラ』諸編の一編である。（編者註）

埼玉県***市在住の会社員坂井田道郎さん宅の次男、坂井田淳君（当時七歳）が行方不明になったのは、猛暑も終わりかけていた九月半ば、陽射しの強い午後のことであった。

その日、淳君は公園近くの通称「青鷺山」といわれる雑木林で、三時過ぎから友達と遊んでいたのだが、いつのまにか姿が見えなくなくなり、そのまま夕刻を迎えた。

まだ明るい六時から七時頃の間、家族はしばらく手分けして息子を捜していたが、まもなく捜索願いが出された。

翌日から、県警、地元消防も繰り出して、町内会でも独自の捜索隊が組まれた。

銀鼠色の曇天の下、近くの用水路や、溜池などにもボートが浮かべられ、長い竿を斜めに差し込まれて、水底に淀んだ泥の層が、丹念に掻きまぜられた。

二日前の豪雨により、川や沼地の水かさも、ひとしきり増えていた。

溜池の水の濁った緑色が、捜索隊の面々に、次第に厭な予感を与えていた。

当時、関西方面において、子供を対象とした猟奇殺人が頻発していたので、この失踪事件も、メディア等で異様なほどの関心を集めていたのである。

二日経ち、三日経ち、捜索隊にも、疲労と焦燥の色が、隠しようもなく現れてきた。

さすがに一週間を過ぎると、近所の者たちは目配せを始めた。

「こういうことは、あまり言うてはいけないと思うんだけど」と前置きしつつ、「淳ちゃん、もう駄目かもねえ」と息を殺して噂しあった。

「可愛い男の子だったのに」

「よく道で出会うと、きちんと挨拶されたわよう」

――ところが淳君は、ちょうど二週間後に、同じ公園から、ひょっこりと現れたのである。

小声で噂しあっていた近隣住民は、ホッとすると同時に、何だか裏切られたような、もの足りないような、まるで侮辱されたような不満げな顔をした。

少年は、しょぼんとして横断歩道の脇に、一人で呆けたように立ちつくしていたのだという。

服装も汚れてはおらず、さっぱりとして、アイロンこそかけられていないものの、まるで洗濯されているかのようであった。

「淳君、淳君じゃないの！」

近所のおばさんが彼を見つけ、びっくりして駆け寄り、小さな肩を前後にゆすった。

「良かったァ、無事で。いま、おばさんが、ママに連絡してあげるから。ねッ。ねッ」といって、きつく抱きしめられ、頬ずりすらされた。淳君は強い口臭を嫌がって、顔をそむけた。

淳君自身の話によると、気がついたときには、ベンチで寝ていたという。

「お腹はあまり空いてないけど。できれば、おいしいものが、食べたいです」

眠そうな目を擦りながら、少年ははっきりと警官たちに訴えた。「……たとえば、お寿司とか」

育ちの悪くない、はきはきした喋り方だった。声変わり前のいくぶんハスキーな声だった。

しかし、「できれば、おいしいもの」とか「たとえばお寿司」などと要求するのは、人騒がせな失踪事件の張本人のくせに不謹慎ではないか、旧式な地元の大人達から、そんな反感をかった。彼らは実のところ、この事件で、もっと過酷で非人道的な、ゾッとするような惨劇を期待していたのであった。

案の定、翌日の新聞には、

——『お寿司が食べたい！ 行方不明の少年、元気に訴える』——

という、いかにも日本の大新聞にふさわしい、感傷的な見出しが踊った。記事の文体も、ジャーナリズムというよりむしろ、演歌の湿っぽい歌詞に似ていた。

有名になった少年は、その晩、「もう、飛行機、飛んでこないの？ 電気、消さなくてもいいの？」と不可解なことを言っていた。

ところで、これは事件本筋とは、全く関係のない余談ではあるが、淳君が二週間後に出てきたことは、奇しくも一人の青年の将来を救うことになった。

高校を中退したある引き籠もり青年Mが、淳君誘拐の犯人として、まさに冤罪に巻き込まれようとしていたのである。

テレビでも報道され、全国的に注目を集めたことを意識した地元警察は、何とか手柄を立てようとして、最初からこの引き籠もり青年Mに見込み捜査を行っており、近隣住民に、しつこい聞き取り調査を繰り返していた。

さらに地方新聞と、全国紙一紙には、それとなく、リークしていた。長年、警察と癒着関係にある老練な地元記者は、「二十二歳の青年、犯行をほのめかす」という記事の草稿をすでに書き上げており、手ぐすね引いて待っていた。

確かにMの経歴は無傷ではなく、過去二度ほど、万引きの前科があった。

警察は、雰囲気をも十分に盛り上げてから、世論の後押しを支えに、この二十二歳男性のアパートに、踏み込もうと待ちかまえていたのである。万引きと誘拐は違うだろうというシロウト考えなどは、まったく問題にならなかった。

ところが、こともあろうに淳君本人が戻って来てしまったので、このシナリオはすべてはオジャンになった。署長は期待していた手柄を奪われ、舌打ちをし、捜査資料を机の上に叩きつけた。その夜、彼は、和服の似合う愛人が経営している小料理屋で、ひとしきりヤケ酒を飲んだ。地元新聞には箝口令を敷き、一切何もなかったことにした。

——さて、失踪していた十日間の話は、驚くべき内容であった。

淳君は、友達と隠れん坊をしていて、不意に笹藪の中の穴にずるずると落ち込み、暗がりの中に尻餅をついたという。

「でも、大して痛くはありませんでした」

こうして強がってみせるところが、いかにも男の子らしい。

そこは洞窟みたいな暗い場所で、奥にはぼんやりと明るい小部屋があった。怖る怖る這い進ん

で覗いて見ると、狭い茶の間になっていた。

薄暗い中、がっしりした肩幅の広い男の人が、背中を丸め、ちゃぶ台で手紙か何か書き物をしていて。破れた障子、古びた裸電球、黒びかりする仏壇。

そして柱の上の方には、勲章をつけた誰か偉い人の写真があったという。

「あら、まあ。子供じゃないの」と女の人にいわれ、その前後はよく覚えていない。

多分、疲れて眠ってしまったのだろうと彼はいう。

「満州に手紙が届くのに、何日かかるんだ？」

二人の大人が、小声でそんな会話をしているのを、夢うつつに聞いた気がする。

その穴倉には、家族のような数人が住んでいて、そこでたいへん親切にされ、食べ物まで与えられた。一家の長らしき父親と、痩せた母親、十代の娘が二人。それと、ときどき奥から現れるカーキ色の服を着て、顔の壊れたような謎の男の人達。

女達は皆、妙な野暮ったいズボンを履いていた。髪がほつれて、少しやつれたような険しい顔をしていた。それでも淳君は、こんな所に子供が舞い込んできたというので、親切にしてもらい、しきりに世話を焼かれた。

彼の話から推測してみると、勲章をつけた誰か偉い人の写真というのは、どうやら昭和天皇皇后両陛下の写真らしい。

がっしりとした肩幅の広いおじさんに、何歳だと聞かれてたので、七歳だと答えた。

「うむ」といっておじさんは、淳君の頭をごわごわした太い手で、撫でた。

「いいか、小国民。君らもいまは辛いだろうが、もう少し、もう少しの、辛抱だ」

きちんと正座して、家長の言葉を聞いている女達は、皆、真剣な眼差しをして、大きく何度も頷いた。

「やがて、一気にすべてが、逆転する日が来る。必ず、来る。いいか、この日本はな、神仏によって、守られているんだ。鬼畜米英、なにするものぞ。な。その意気で、やりたまえ！」

おじさんはジロリと睨むと、一拍おいて、「ハイ、は？」と訝った。

「ハイって、言いなさい」とお姉さんたちが、脇から彼の膝をつつき、催促した。「さ、ハイって」

きれいな人差し指が二本、しきりに両側から太ももをつつくので、淳君は恥ずかしかった。

よくわからないものの、少年は気配を察知し、「ハイ！了解いたしました」と元気に答え、顔を桃色に上気させた。

「よろしいー」おじさんは、しごく満足そうに頷いた。「うむ。なかなかよろしい」

適応能力の高い淳君は、にっこりと微笑んでみせた。

「了解いたしました」を加えたのは、サービスである。大人達の前では、いつもそうやってきたのである。機を見るに敏なソツのなさが、この地下の住人にも気に入られたらしい。

ただ、時折、奥の暗がりから、湧いてくるように姿を表す、顔の腐りかけた男の人達が、薄気味悪かった。皆、汚れた兵隊の格好をしていた。中には、ミイラのように頭全体に包帯を巻いたり、手や脚が片方もげて無くなってしまっている人すらいた。顔が崩れているのが自分でもわかっているのに、彼らは子供の前で怖がらせないようにと、ひどく遠慮していた。きっと病氣

なのだろうと、賢い淳君は思った。

「それで、あなたは？」

と、おじさんが、優しく尋ねる。

「……サイパンであります」相手は、苦しげに答えた。

「そうですか。そうですか。で、そちらの兵隊さんは」

「自分は、ガダルカナルから、やって来ました！」

眼窩の奥の眼を、異様に輝かせてその人は応えた。

「大変だったでしょう。はるばるご苦労様です。祖国のために、お疲れ様でした。さ、さ、遠慮なく、お粥でも食べてください。本土といっても、もう、何もありませんが。温まります」

おじさんはそう言って、親切に彼らをねぎらった。淳君は、こんな姿になってしまった人達を、ちっとも怖がらずに助けているおじさんを、とても立派な人だと尊敬した。

とはいうものの、サイパンやガダルカナルから、いったい彼らがどうやってここまで来たのか、さっぱり分からなかった。詳しくはないが、賢い淳君は、それらが南洋の島であるらしいことは知っていた。

ともかく長いこと地下に住んでいるこの一家は、背中を震わせ、泣き出しそうになっている異形の兵隊さん達にしきりに世話を焼いている、美しい奇特的な家族なのであった。

——この妙な地下豪で、何日間かが過ぎた。

寝ていると、ときおり何かもの凄い破壊音がして、心と起きてしまう。

棚の上のラジオが、ジージー、ガーガー、ピーィッ、とがなりたてた。

「しっ、空襲だ！」とあって、おじさんに、頭を押さえつけられた。「電気、電気」

すぐに女達が立ち上がり、裸電球を布で覆って、光を消すのである。

何かが外で、がらがらと崩れ落ちる。

恐ろしい轟音が静まり、しばらくすると、「ああ、良かった、良かった。ナンマンダブ、ナンマンダブ」とあって、ようやく彼らは安堵して起きあがるのだ。

毎日、彼らはそんなことを、何度も何度も繰り返している。

ただ何よりも辛かったのは、出てくる食事、出てくる食事が、さっぱり美味しくないことであつた。お寿司や、ハンバーグや、ケーキが食べたかった。イモだの、薄いお粥だの、大根や野菜の切れ端だの、こんなものでよくもまあ、あんなに元気にしていただけるものだと、淳君は子供ながらに思ったという。

*

……団地脇の公民館で、ささやかな祝賀会が行われた。淳君は、町内会の大人達の前で、自分が見てきたものを、素直に話すはめになった。

しかし、ウケはたいへんに悪かった。仕方のないことではあるが、誰もそんな馬鹿げたことがあるわけがないと、一笑に伏したのである。

話が終わり、それでも誰かが感想をいわなければならないので

「淳ちゃん、あなた、悪い夢を見たのねえ。脳外科でのきちんとした精密検査が必要だわね」

民生員の佐々木さんという女性が、同情したように口を切った。

淳君は不満だった。しかし上目使いで睨んだだけで、あえて反抗はしなかった。

「いやあ、これは。いってみれば、民間伝承や、民俗学の類ですな」

「神隠し。柳田国男の世界ですかねえ」

一応、読書家で知られているパン屋の主人と、塾の先生とが、そんなふうにつけ足した。他の皆は、腕を組んで、重苦しく押し黙ったままだった。

参加していた坂井田家の父親と母親は、すっかり面目を失っていた。わが子が自分の家出を誤魔化すため、途方もない嘘をいっているのではないかと疑ったのである。

ところが、しばらくして言いにくそうに口を挟んだのは、町内最年長の吉田老人であった。

「あの。……じつは、あそこはな。昔、防空壕があったところなんだがねえ」

九十七歳になる吉田喜一翁が、感慨深げにそう呟いた。「わしらが、掘った」

好意的な失笑が洩れた。

もはや九十五も過ぎたら、何をいっても許してやろうという奇妙な寛大さが支配した。皆、「防空壕」という言葉を、数十年ぶりかに聞いたのである。

「あの中では、生き埋めになって、何人も死んだもんだ。ハア、あれは確か、昭和二十年の春のことだったかのオ」

縁起でもない。

こんな馬鹿げた話は、あまり地元にとってもいい話ではないし、最近はネットで悪い噂はすぐに蔓延してしまう。心霊スポットなどと称して、変な名所にもなりかねない。

町内会の面々は秘密の会合を開き、吉田翁にはこれ以上喋らせないように工作した。家族にそれとなく圧力をかけたのである。

その後も何度か、淳君は、明け方に「くうしゅう」の夢を見たらしいが、やがてそんな悪夢も見ることがなくなっていった。二週間の授業の遅れなど、すぐに取り返してしまった。幸いなことに、強い精神的トラウマを抱えることもなく成長したらしい。

しかし、この小事件でとばっちりを受けたのは、吉田喜一翁九十七歳であった。

「坂井田さんとこの、ほれ、小っちゃい坊主が見たっちゃうのは、あれは、ハア、防空壕の中で生き埋めになった……三好さんちの……。」

まだら惚けの進行する過程で、そんなふうにいかけた途端、老人はたちまち家族にさえぎられた。

「はいはい、お爺ちゃん、もう寝ましようねえ。もう寝ましよう」

と、皺だらけの口元を、家族の手で、注意深く押さえつけられるのであった。老人は危うく窒息しかけて、これは保険金殺人ではないかと疑った。それでも老人は、訴え続けた。

「あの三好さんの旦那さんてのはな、面倒見のいい、それはそれは、立派な人格者でな」

老人は、町内の歴史を知っているのはもはや自分しかいないのだという、生涯最後の使命に燃えていた。終いには「わしも、今朝方、三好さん家で、お粥をよばれてきた」などと突拍子もないことを言い出す始末であった。「あそこん家は、みんな元気でやっとなア」

この件にふれた途端、鶏ガラのような貧弱なご老体は、がっしりした登山家のような体格の嫁

に背負われて、布団の敷いてある奥の部屋へと、運ばれていったものである。

「俺は惚けとらんぞ。惚けとらんぞォ！」と叫びながら……。

その吉田老人も、二年前、子供や孫やひ孫に見守られつつ、幸福な大往生を遂げたという。

むろん、淳君の話は、穴の底で気を失っている間に、いかにも子供らしい無邪気な夢を見たという、日常的なリアリズムの物語へと回収された。

さて、そんな数奇な経験をした坂井田淳君も、今年の春に、めでたく***市立東小学校を卒業した。卒業アルバムの後ろのページでは、元気にVサインをして、友達と写っている。東京のある有名大学の付属中学の入学も決まっらしい。もともと成績の良い優等生なのである。

とはいえ、あの失踪事件についてはすっかり忘れてのことだろう。

「およばれ」 (了) 『インキュナブラ』諸編の一編

理人より)

……たしか1990年代前半のある年、肌寒い晩春だったと思う。

東京都内の片隅でひっそりと営まれているわれわれの文学結社に、董色の封筒に入れられた分厚い原稿が送られてきた。

原稿は手書きであり、神経症的に薄い震えるような青い文字で書かれてあった。奇妙なことに、文字は青鉛筆、青いボールペン、ときに紫色の色鉛筆で描かれている。ほとんどは青い色鉛筆で薄く書かれたきわめて読みにくい原稿だった。

差出人は「シビラE」と称する正体不明の人物で、十代の少女だという。

しかし実際のところは、自己紹介としての具体的な生年月日も性別も書かれていない。いわゆる「なりすまし」の可能性もあるし、ひょっとしたら、少女のふりをした、くたびれた中年男かも知れない。記されている住所からは、北関東圏のある地方都市に住んでいることだけがわかった。

『インキュナブラ』というタイトルのその作品は、どうやら短編集のようであり、「廃屋のシェヘラザード」を自称する主人公の少女が、大人たちを避けて、森の奥の見捨てられた山荘に閉じこもり、白痴の美少年「洋市」に語る物語の集合体だというのである。

サブタイトルに「終末の子供たち」と書かれてあった。

そのシェヘラザードとは、どうやらシビラE自身のことらしい。そもそも『インキュナブラ』という聞き慣れないタイトルだが、手っ取り早いのでいまウィキペディア（確か原稿を受けた当時は、まだこんなものはなかったと思う）を検索してみると、

「インキュナブラ (incunabula) は、西欧で作られた最初期の活字印刷物のことであり、15世紀（グーテンベルク聖書以降、1500年まで）に活版印刷術を用いて印刷されたものを指す。揺籃印刷本、インクナブラともいう (incunabula はラテン語でゆりかごの意味)」とある。

中世からルネッサンスにかけての「本のゆりかご」「揺籃印刷本」だそうである。孵化、培養、潜伏を意味するインキュベーションなどの言葉はこの同類らしい。

私は、ゆりかごという言葉が気になった。

その日、私は不審に思いながらもその原稿を一晩持ち帰り、一読してみた。

手書きの文字が読みづらいので、明け方までかかった。金星の光る寒々とした紫色の空を眺めながら、私はコーヒーカップを片手に、大きく溜息をついた。

それは奇妙な読後感だった。

ひとつひとつの物語は、主人公の語る脈絡のない物語、幻想的な奇譚の類であり、それぞれの話は連続してはいない。つまり作者は一体何が主張したのか、いっこうに分からないのだ。それは小説というよりは、むしろ統合失調症の人間の手になる奇妙な手記や雑稿であり、作者は近代小説の骨法も理解していないようであった。

そもそも語り手そのものが、一人称になったり、三人称になったりと、混乱をきわめたテキスト群なのである。しかも、数十枚の中編もあれば、わずか数行で終わっている掌編もある。

この作者は、構成という概念がまるでない。

かのアラビアンナイト『千夜一夜物語』、あるいは中国の怪異譚『聊齋志異』のパロディを狙っているのか。詩的な文体と、怖ろしく生硬な論文まがいの文章とのぎくしゃくした混淆体。

形式上の冒険といえはいえないこともないものの、他にどんな意図があるのか、作者が眼前に姿を現さないで、その全体像がつかめない。

おそらくは合評会などでも、いかにも「頭だけでこさえたツクリモノ」と一刀両断されてしまいそうな作風だ。(日本の同人誌ギルドに棲息する古い文学老人にはこの手の輩がいまだに多い)

先程のウィキペディアの解説に何かヒントがあるかも知れない。

「(インキュナブラには)キリスト教関係の本や人文主義者の著作などがある。中には装飾写本を模して手書きで彩色をほどこしたのものもある。なお、フィレンツェで最も数多く出版されたのは、15世紀末のサヴォナローラの説教であった。(中略)ヨーロッパの歴史ある図書館では、インキュナブラの所蔵数で歴史的価値が判定され、また、古書蒐集家はインキュナブラを何冊持っているかを競うことがある。」

しかし、この青い引っ掻き傷のような文字で埋められた生原稿にざっと目を通す限り、むろんサヴォナローラのような深遠な思想は見当たらない。

そんなこんなで、他の同人達と検討した結果、掲載見送りとの答えが出た。

しかしその旨をハガキで伝えても(シビラEは電話、携帯、メールを使わなかった)、一向に意に介さず、再度原稿を送りつけてくる。

その断続的なやりとりが確か2000年まで続いたと思う。

彼女の原稿は判読しがたいものも含めて、事務所の片隅の段ボールにうず高く積もっていった。その原稿の束は、パラノイアの独り言のような妖気を放っていた。

――その送付がある時点で、ぴたりと止んだ。

しばらくはそのことにすら気がつかないままであった。

そのうち私達は『インキュナブラ』に興味をなくし、仕事や雑事や会合や、日々のあれこれにかまけて、シビラEの原稿の山をほったらかしにしておいた。

あるとき、誰ともなく、「あの青鉛筆のシビラEは死んだのかも知れない」というようなことを囁き始めた。

見捨てられたような北関東の地方都市の森の廃屋で、自らの妄想に身を焼きながら、物語の精霊として孤独に死んでいった少女の幻影が脳裡を離れなかった。ひょっとして、世を呪って自殺したのではあるまいか。私はそれを聞いて薄気味悪くなってきた。

ところが二十一世紀を迎えてから(.....凄い言葉だ)再び、あのシビラEから厚い原稿が送られてきた。

それは案の定、針金のような文字で綴られた『インキュナブラ』の続編であった。

この原稿でまたしても「廃屋のシェヘラザード」はとりとめもない物語を、シャーリアール王

ならぬ、知恵遅れの美少年に語っているのだ。

しかも、いつも無愛想な彼女は、今回に限って手紙を添付してきている。

「私はシビラE。廃屋のシェヘラザード」

という奇妙な呪文のような書き出しで、その手紙は始まっていた。

「私と洋市は、二十一世紀を迎えられない。誰もいない森の廃屋の中、時空の歪の中で、エーテルの内壁に爪を立てて血を流しています。私はもはや、自分の物語の空間を生きるしかこの世に居場所がなくなってしまった。虚無の時空の渦をめぐる悪夢の泡たちが、ほつれあいながら暗い林を青白い鬼火のように通り抜けてゆきます」

こんな独り言のような文体で手紙は書かれてあった。ここに出てくる「私」はもちろん、書き手を意味しているらしい。

しかしすでにわれわれの住んでいる通常世界は、二つの世紀をまたいでしまっている。テロやら不況やら、現実の国際社会も大きく変動しようとしていた。

ところが彼女は、謎の廃屋に潜む自分たちだけが二つの世紀間の「時間の峡谷」に落ちて、薄闇の底でもがいているというのだ。一体どういった時空の観念なのだろう。成長を拒絶した少女の悪夢なのか、それとも単なるはったりなのか。

というわけでシビラE狂気説が、われわれの間では定着してしまった。どうやら皆、彼女のことはもう触れたくないといった雰囲気だった。それに単純に原稿の体裁からしても、そもそもが連作集という形式であり、掲載しづらいのである。

ところがそこに、予期せぬ支持者が現れた。

三年ほど英国に行っていたK女史が東京に戻ってきたのだ。年下のイギリス人との結婚生活がうまくいってないらしいことは、何となく最近のメール連絡で察しがついていた。

それは花々や青芽の匂いの混じった風が、そろそろ吹き始める物憂い季節だった。

二両編成の世田谷線の発着が臨める鄙びたビルの二階の事務所で、われわれはいつものようにとりとめのない話し合いの時間を持った。

下の階は中東系エスニックレストランになっているので、窓を開けると風向きによっては強い香辛料の匂いが漂ってくる。

「また例の自称シェヘラザードが、原稿を送ってきているね」

「ああ、なぜいつも青鉛筆なんだ。それでなくても手書きの文字は読みにくいのに」

「この筆致、精神を病んでいるのではないかな、この作者は」

ソファに身を沈め、タバコをふかしながら同人たちは話し込んだ。

一人は批評家肌のボルヘス愛好家、もう一人はドストエフスキー崇拝者、そして他の一人は私小説原理主義者、そしてK女史だった。

「この青い文字に対する執着。なにか、精神の崩壊過程を暗示してるんじゃないかな」

「気ままな空想を綴っているだけだ、これは。小説といえるものじゃない」

「でも、ところどころ、ちょっと立ちどまらせるような変なイメージがあるわ」

K女史がつぶやいた。微妙な空気だった。

「童話やお伽噺、アニメみたいなのところもある。浅薄だな」と私小説原理主義者。

「なんだかどこかの病院に長いこと入院中で、閉鎖的な環境にあるんじゃないの。その、べつに、精神病という意味ではないけれど」

これは私のなりの推測だった。

「こんなの、ただの荒唐無稽なホラ話ですよ、所詮。少なくとも、純文学とはいえないね」

ボルヘス狂がいう。この種の作品、幻想奇譚やエッセイ・ストーリーの類に最も寛大だと思われる彼が、いちばん手厳しかったのはどういうわけだろう。

土曜日の夕方であった。

下のレストランの香辛料の匂いが幽かに漂っていた。

「あんたたちって、頭カタイいのねえ」

さっきからK女史は、いささか苛立っているようだった。

「小説って、身につまされるようなものでなくてはいけないわけ？ クドクドと無目的に、心理分析ばかりしているような。最近ウチの同人誌に掲載された作品、どうよ。介護小説だの、失業してハローワークに並んだだの、カルチャーセンターでの講師と不倫しただの。前号に載った作品だって、ひどいものだわ。マンションの一室に引き籠もり、一年間何も事が起こらず猫と語り合うだけの毎日が続いて、ラストでは結局、主人公のネットオタクが猫を殺したあげく、自分も自殺する話。読む前から予測がつくようなのばかりじゃないの。もう、うんざりだわ。」

「悪かったな。それは、俺の作品だよ」

私小説原理主義者が、押し殺したような声でいった。「そんなにいうなら、向こうでのお前さんの壊れた結婚生活、赤裸々に書いてみせたらどうなんだ」

「うるさいわねえ！ 余計なお世話よ。……あのねえ、素朴な実感主義者さん。身につまされるだの、されないだの。それで一体どうなのよ。それが純文学なわけ？ そんなのが時代のリアリティ？ どうして物語であってはいけないの。一般的な物語に回収されないような物語ならば、それでいいのではないのかしら」

それを聞いて、ボルヘス狂が口を挟んだ。

「しかし君、ドン・キホーテ以来、近代小説というものはねえ……」

「ばーか！」彼女は思い切り鼻に皺を作った。

「それじゃ、提案。この暗い、暗～いお伽噺、私が文字起こしするから、紙媒体の雑誌ではなく、ネットに載せるといのはどうかしら」

K女史の謎めいた文学論はよくわからなかったが、こんなふうに強く言い張るので、われわれは同意することにした。あとあとまで尾を引いて面倒臭いのだ。それにK女史は詩も書いているので多少他の者とは感覚が違うらしい。

「そこまでいうなら、君はフローベールを、一体どう思うのかね。つまりだな、マダム・ボヴァリーと作者との関係性について、僕はいつてるわけなのだが」

批評家肌のボルヘス狂はしつこかった。

「くそッ。この屈辱を、そのまま一言一句もらさず、赤裸々に小説に書いてやる」

私小説原理主義者は、押し殺したように下唇を噛みしめた。

「……まあまあまあ、もう、いいから。そろそろ下に移動しよう」

ことなかれ主義と中庸の人を持って任ずる私は、間に入った。

少なくとも『インキュナブラ』という鬼っ子は、支持者を一人獲得したようだ。

われわれは打ち合わせの後、階段を下りて一階の多国籍料理レストランにしけ込んだ。

羊肉を頬張りながら、国際色豊かなビールの小瓶を並べ、ひとごちすると、再びシビラEの話を蒸し返した。なんだかんだいいながら、妙に気になっているわけだ。

この中近東ふうの怪しげな店は、水パイプもやっていて、窓際を埋めた青や緑の水瓶ふうのガラス瓶が、照明の光を透かして美しい。金色の縁取られた装飾部分がきらきら輝き、並んだ瓶たちはペルシャの街の階段迷路を歩む貴婦人の優雅な柳腰のように思えてくる。

どうやら私も、終末の不健康なアラビアン・ナイトに誘われているようだ。この自称「少女」は潜在意識を刺激する書き手ではあるらしい。

*

そうこうしているうちに、何度かの連絡の試みのあと、とうとうシビラEは、われわれと会うことを承諾した。場所は、原宿神宮前の住宅街の裏手にある喫茶店で、K女史が同行した。かつてシビラEが中退したデザイン学校の近くなので、地理が分かりやすいというのである。

指定の店に入ると、壁際に黒眼鏡の痩せた女性が座っていた。

全身黒の服装で髪は長く、盲人のように杖を突いている。鼻は尖っていて、眉間に険しい皺があり、どこか凍りつくような気配があった。かすかに不幸の気配がした。年齢は、三十代半ばぐらいだろうか。

さすがに私はぎょっとした。

確かにあの作品は、十代の少女の空想とは思えないニヒリズムや、人生と存在への疲労感、どこまでが本当か分からないような妙ちくりんな雑学が混在している。とすると、これがおそらく現実なのだ。

まさかと思いつつ、念のために尋ねてみた。

「すみません。ひょっとして貴女は、シビラEさんではないでしょうか」

尼僧とも魔女ともつかないその女は、何もいわずに私を見返すと、無言で首を振った。

私はほっとした。本人であつたらそれなりにショックだったかも知れない。きっと、あの青鉛筆の原稿の放つ病的で不吉な感覚が、黒い喪服のような死の気配を醸し出していたのだ。

私は安堵して、踵を返した。一仕事した気分だった。

ところが帰り際、奇妙な黒と白との服装をした痩せた少女と目が合った。さっきまでここには誰も座ってはいなかったはずだ。私を見上げ、驚いたように目を見開いた。

色白で優雅だが、どこか退廃の色を帯び、北欧の娘のような雰囲気を持っていた。美しい顔立ちなのだが、その瞳は病的でとげとげしく、私は路上に打ち捨てられた人形を連想した。

しかし私はそのまま、ドアを開いた。

なぜあの時、私はうろたえたのだろうか。いや、彼女の持つ他者への脅えが、まるで静電気のよ

うに、瞬間的にこちらに感染したようにも思える。

いま考えると、あの痩せたひよわなフランス人形のような少女こそが、シビラEだったのかも知れない。これは後付けでいうのだが、彼女の目の中に、私がすでに社会人としての贗のペルソナの下に何とか隠蔽に成功した、怖れと不安の色を直覚したのかも知れない。

「おかしいわね。そんな子、いなかったわよ」

同行したK女史は、いぶかしげにいった。

私の潜在意識がでっちあげた幻の可能性もある。

しかし私は、外人のような少女の服装をK女史が「ああいうファッション、ゴスロリというのよ」と教えてくれたことを具体的に覚えている。しかし彼女は、そんなことを言った記憶はまったくなく、単なる私の妄想だと言い張るのだった。「だって私、記憶力いいもん」

ちなみにこのゴスロリという言葉は、ゴシック・ロリータの略らしい。妙なファッションが流行るものだ。私の下意識は、同一人物を二人の存在として勝手に脚色したのかも知れない。

ひょっとしてあの少女は、あのままの姿で、ひっそりと放心したように、いつまでもいつまでも座り続けていたのではないかとも思う。

といったようなわけで、シビラEが何者なのか、いまだ不明なのである。

ただ、このまま蜻蛉の死骸のような文字が集積した生原稿を、事務所で発酵させておくのも寝覚めが悪いということで、とりあえずネット上で公表することになった。

『インキュナブラ』という作品が、それぞれに文体も異なり、まるで無骨な違法建築のように全体としてのまとまった構成がないのは、このように散発的に送られてきた背景からである。

――現在、K女史のボランティア作業によって打ち上がっている原稿は、

『忘れられない本』『二階のつきあたりの部屋』『干し首』『剥製』『砂場』『犬インフルエンザ』『液晶幽霊』『盲人植物園』などである。これらは不定期ながら順次アップされていく予定である。

(『忘れられない本』『二階のつきあたりの部屋』『犬インフルエンザ』は既に本サイトにおいて公開済みである。これはあくまでも仮説であるが、一人称で書かれた『忘れられない本』に出てくる主人公が、作者の肖像に最も近いと思われる)

最終的には「柀物語」「入れ子構造の物語」としての体裁を整え、全体の順序を整理して再掲載されるだろうが、流れや構成はまったくあてにできない。

もともと、それ自体で自己完結しているような挿話の並列という雑多な形体の文章群なのだ。あえて何かに喩えるならば、無意識的に自己増殖していくいびつな砂漠の蟻塚のようなものに、やや似ているかも知れない。

シェヘラザードは「千と一つの物語」を語り終えたあと、いつしかシャーリアール王の人間不信を癒し、三人の子供をもうけていたというが、『インキュナブラ』からは、とうていそんな人間的で温かな救済は期待できない。そもそも話し相手の洋市は、物語が理解できないらしいのである。これはディスコミュニケーションを基調とする暗い物語の森なのだ。つまりシビラEは、語る目的不在の冷たい虚空に向かって、独り語り続けているのである。

こうした経緯から、われわれの原稿の保管が不適切だったために、ひとつひとつの独立した短編や掌編をばらばらに掲載することになってしまった。こんな代理人の「序」ではなく、「粋物語」の前提を占める作者本人による全体の「序」、「導入部」の原稿がどこかにあったはずなのだが、いまだに捜し出せてはいない。

それらは改めて全体の手書き原稿を整理した後、K女史によってきちんと文字データとして打ち直されてから公開できる形になるかと思う。

ちなみに、後で調べたところによると、「シビラ」とは古代ギリシャにおいて巫女、預言者を意味する言葉らしい。巫女は神聖なる娼婦でもあったという。たとえば有名なデルフォイ神殿の巫女などである。作者の自己妄想の一端が伺えるペンネームではあるようだ。

(『インキュナブラ』代理人Grasshouse

記す)

『インキュナブラ』既出掲載作品

<http://p.booklog.jp/book/42058>

『序』

『干し首』

インキュナブラ INCUNABULA 花壇の中のガニメデ

<http://p.booklog.jp/book/42495>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42495>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42495>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.